大学教育の一環としての佐渡集落における芸能活動の意義

森　下　修　次

1．はじめに

子どもたちに身につけさせたい能力の一つとしてコミュニケーション能力がある。これは語学力のことではなく，人が周りの人と意思疎通を図るために必要となる能力である。これらの能力は家族，地域社会及び学校を通して自然に身につけるものと思われてきた。しかしながら，本来，必要なコミュニケーション能力を身につけるはずの成人した大学生でも，適切なコミュニケーション能力がついていないと思われるケースがしばしば見られる。こういった問題意識は小中学校でも持っていて，ある小学校等では校外学習などを学年毎での集団ではなく，年長学年の生徒児童が年下の生徒児童の面倒を見ながら活動を行ったり，地域の大人が積極的に関与するなどの試みが行われている。ただ，これらの活動は全ての学校で行われているわけではなく，しかも，社会全体が縮小し，人口減少のため周りの大人と十分なコミュニケーションを取らずに育ってきた可能性のある今日の大学生にとって，意識して育てていかなければならない能力になりつつあると思われる。そのような大学生が採用された結果なのか，教育現場でも子どもや父母とコミュニケーションがうまく取れない教師もいると聞く。このことはコミュニケーション能力を持たない本人は元より社会にとっても損失で有り，実は由々しき問題である。

そこで，そういった学生のコミュニケーションの学習機会の場として集落の祭りに参加することは有意義だという仮説をたてて検証することにした。

2．森下研究室・ゼミの学生が佐渡の祭りに参加した経緯

佐渡は芸能の宝庫と言われている。芸能の多くは各地域の祭りとして催される。特に毎年４月14日，15日は佐渡中で祭りが行われる日で，特に15日は多くの地域で祭りが行われる。佐渡の祭りの多くでは鬼太鼓（おんでこ）と呼ばれる芸能が行われ，それらは門付け芸として，集落を一軒一軒周ることが多い。祭りでは五穀豊穣，子孫繁栄，疫病退散など芸能を通して願い，一部の祭りを除き島内外から観光客が来ることは希であることからも各集落にとって重要な年中行事であり，観光目的でないことがわかる。

私はそれらの祭りを見学すべく2007年４月14日15日に私の研究室・ゼミに所属する３，４年生の学生11名を引き連れて佐渡に渡った。この年は曜日の配列が良く，14日15日が土日に当たったこともそれを後押しした。同じく音楽教育研究室（伊野義博教授。以下伊野研究室）が毎年同様の研修を行い成果を挙げており，それを真似たものでもあった。私と学生一名が自家用車を持ち込み，分乗して両津の春日町を皮切りに２日で島内10カ所程度回った。宿では時間の関係で食事を予約していなかったので，コンビニ弁当で済ませた。祭りそのものは興味深いものであったが，事前学習の不足のためか，学生の祭りに対する関心はもう一つであった。

次の2008年にも佐渡での研修を考えた。伊野研究室は毎年佐渡研修を３年生に対して実施しており，私の研究室も同様に実施することを考えたが学生の乗り気は今ひとつであった。曜日も14日，15日は月曜日火曜日に当たることから全員で訪れるのは無理と判断した。そんな中で女子学生２名が興味を示し，４月９日，島内で稽古が一番厳しいと言われている大野地区の祭りの稽古を見学することになった（図１）。

2014.6.30　受理



図１ 大野地区の鬼太鼓（2009年４月13日）

このときの案内が松田祐樹氏であった。元々伊野研究室の佐渡研修でも松田氏の世話になっており，春日鬼組（佐渡春日地区の鬼太鼓）の一人として，和楽器講習会や日本音楽教育学会妙高ゼミナールでワークショップを行ってもらったことがある。2006年４月14日，私が個人的に佐渡を訪れたときもたまたまお目にかかり，幾つか祭りを案内して頂いた。2007年の佐渡研修も松田氏の取材に同行する形で，一部の祭りを一緒に回った。2008年の大野地区の祭りの稽古に訪れた際，松田氏から是非観て欲しい集落があるので同年４月13日（日）に佐渡に来て欲しいと言われ，同日再び佐渡を訪れ，案内されたのが豊岡地区であった。

豊岡は東海岸に位置し，32世帯67人が居住し，そのうち高齢者人口39人で高齢化率　58.2％（2012年４月現在）である。海岸から急峻な山地が立ち上がり，そこに家々が立ち並ぶ美しい集落である（図２）。



図２　佐渡豊岡地区（2009年３月31日）

毎年４月第２日曜日に行われる祭りは集落内の男衆によって行われる。私が訪れたときは２匹の鬼と太鼓奏者，太鼓運搬担当の５人程度のメンバーが細々と鬼太鼓の門付けを行っていた。このときの鬼の演者の一人は還暦間近ということであったが，鬼の舞はたいへんきつく，しかも門付けで数をこなさなければならず，おまけに家々を回るためには急峻な細道を太鼓を担いで登りおりしなければならないため，傍で見ていても大変さが伝わってきた。本来，鬼太鼓は青年層を中心とした若者が行うもので，例えば大野地区は鬼を打つは基本的に20歳代であり指導も含めて40歳では完全に引退と大きな違いがある。豊岡地区でもかつてはそうであったが，豊岡の祭りの特徴の一つの大獅子（鬼と獅子との絡み）が行われなくなって久しく，集落の高齢化に伴い祭りの存続のためには年齢のことを言っておられなくなり，鬼太鼓もいつまで続けられるかといった状態であった。

私はしばしの時間，豊岡の祭りを観た後，歓談中に松田氏から「来年から研究室・ゼミの学生を豊岡の祭りに参加させてはどうか」という提案であった。私は一瞬躊躇したが，私自身が大学院生のとき奈良県十津川村の盆踊りを指導教員の元訪れたことを思い出し，承諾した。十津川村の経験から「地元に快く受け入れてもらうこと」「１年限りではなく，できる限り永続的に参加する」ことが必要不可欠であることが分かっていたので，私としても腹をくくって返事をした。松田氏も長年にわたって佐渡の祭りを観てきた中で，人口減少による祭りの衰退を何とかしたいと思いがあり，集落の年齢構成，トラブルの可能性の有無等の諸条件を考慮の上，複数の集落に打診し，受け入れ可能性のある地区として豊岡を考えたそうである。なお，当初打診して大学生の受け入れを断った地区も，後年，豊岡での成果やさらなる人口減少のため，集落から大学生の参加を打診してきたケースもあったと聞いている。松田氏の提案を，祭り当日は即答を避けた豊岡の人々も，後日会合で正式に受け入れることになった。

学生を受け入れる際，問題となるのは宿舎，食事，風呂である。宿舎は改装して間もない公民館があり自炊も出来ることから，貸し布団を借りて来ることで宿舎と食事の問題は解決した。問題は風呂で，近くの温泉や公衆浴場までは自家用車で片道30分程度要する。しかも，地元の方々が学生の指導できるのは仕事の終わった夕方午後６時以降に限られるので，入浴時間はどうしても９時以降になって

しまうが，最寄りの温泉施設は９時が閉館時間である。３月下旬でまだまだ暖房が必要な季節とは言え，鬼太鼓の稽古はそれなりに汗をかく。そのため学生は２～３名に別れていくつかのお宅にもらい湯に行くことになった。もらい湯のために各家の受け入れ体制が必要で，男衆のみならず家々の主婦や家族の協力も必要である。祭りの日，受け入れの是非を即答できなかったのも風呂をどうするかが大きかったようである。受け入れ先には負担を強いることになったが，反面多くのメリットもあった。それについては後述する。

３．森下研究室・ゼミによる「佐渡合宿」の開始

2009年２月14日には伊野研究室と共同で鬼太鼓のワークショップを新潟大学で催した。講師は松田氏と，同じく佐渡で鬼太鼓を伝承されている２名の合計３名であった。学生の他，卒業生や小中学校の現職教員がワークショップに参加した（図３）。



図３　鬼太鼓ワークショップ

2009年２月15日にはリーダーに就任した女子学生１名，松田氏と私の３名でお願いと挨拶のために豊岡を訪れた。ここで豊岡の鬼太鼓に学生が参加することが正式に決まった。リーダーに就任した学生は2008年大野に見学に訪れた学生の一人で，以後，歴代のリーダーは内部で「佐渡長」と呼ばれるようになり，同時にこの活動を「佐渡合宿」と呼ぶようになった。同時に松田祐樹氏は関係する有志とNPO法人佐渡芸能伝承機構を立ち上げ，理事長に就任された。「佐渡合宿」がNPOの最初の仕事になり，風呂の食事の手配など豊岡の方々と交渉あるいは調整役として活動された。当初は鬼太鼓の習得には時間がかかると予想され，松田氏からは10日から２週間という計画が示されたが，いくら休み中とはいえ学生を２週間佐渡に拘束するのも無理があったので，相談の結果，合宿期間は６日程度，一旦大学に戻った後，祭り前日の土曜日に再度訪れ，祭りの次の日の朝一番に大学に戻るという計画で行うこととした。こうして，2009年３月30日から４月３日までの日程で院生を含む11名の学生たちと共に佐渡・豊岡を訪れた。

参加学生は３年生，４年生（過年度生含む），大学院生の男子学生５名，女子学生６名であった。公民館には厨房施設があるので，それを利用して食事は学生が交替に作ることになった。６畳広間が２間続きであったので，食事など昼間の活動時は12畳の部屋として使用し，就寝時には襖で二部屋に分けて，男女別の部屋とした。学生が泊まる部屋しかなかったので，指導教員の私の風呂と就寝は車で15分のところにあった国民宿舎を利用した。



図４　公民館での食事風景（2011年３月25日）

合宿中昼間は食料の買い出しや４月１日の杉野浦地区，４月３日の浜河内地区の祭りにも松田氏の案内で見学に周わった。学生が豊岡の祭りに参加するにあたり，久しく途絶えていた大獅子の復活という命題があったが，両地区の大獅子の見学や実施に中に入っての体験など，豊岡の祭り本番に向けても有意義な研修となった。夜は豊岡の鬼太鼓を伝承している方々からの指導の下，稽古に励んだ。また，大獅子は豊岡では伝承が途絶えて久しかったので，松田氏の計らいで地区外部から講師に来てもらい指導を受けた。また，集落には中学生の兄妹と20歳台前半の学生と同年代の青年がいたが，昼間などは春休みで家に居た中学生の兄を先生として自主稽古に励げみ，夜の稽古時には他の大人たちに同じくこの青年の指導も受けた。また，合宿の様子は新潟日報の密着取材を受け，祭り当日の様子も含め，2009年４月16日付け新潟日報朝刊に20面一面を割いて掲載された。



図５　「鬼」の稽古（2009年3月30日）



図６　「獅子」の稽古（2009年3月30日）



図7　朝の自主稽古（2009年3月31日）

４月３日の浜河内の祭り見学後は一旦大学に戻った。この間，ガイダンスや授業登録など気ぜわしい時期であるが，その合間を縫って自主練に励んだ。そして４月11日再び豊岡を訪れ，集落の方々と祭りの準備を行った。翌12日は祭り本番を迎えた（図２，３，４）。天気にも恵まれ，集落の皆さんから声援を頂いた。また，新潟日報の他，NHK及びNSTのローカルニュース，佐渡ケーブルテレビで放送され，翌年には読売新聞の地方版にも掲載されたことから，佐渡島民に広く知られることとなった。



図８　祭り前の記念写真（2013年4月14日）
この年，初めて学生が鬼の面をつけさせてもらった。



図９　学生による「助打ち」風景（2009年4月12日）
右に見えるのは新聞社取材のカメラ



図10　豊岡「大獅子と鬼との絡み」の復活（2011年4月10日）

その後，毎年半数の学生が入れ替わりながら続けている。卒業生も毎年数名豊岡の祭りを見に来てくれる。2011年には東日本大震災が起き，祭りを中止するかどうか議論されたが，中止するより祭りを行って復興の祈りを届けるということになり例年通り行われた。

４．祭りに学生が参加する意義

この活動を通して，地元も学生も変わった。まず第一に夕方に行われる稽古が変わった。稽古場所は神社の神殿前の建物で中に囲炉裏があり，そこで暖を取ったり酒の肴である干し烏賊を焼いたりしていた。学生が参加する前は，いわゆる初心者はいなかったので，所作の確認だけで良く，おそらく酒を酌み交わしての交流が中心だったと思われる。学生の参加した１年目は，指導方法も熟れていなく，昨年までの感じが残っていたようで，終了の時間も結構遅い時間まで行われた。しかし２年目からは指導者と囲炉裏担当が持ち場を明確にし，時間もある程度決めて，稽古全体が系統立てて行われるようになった。2011年からは学生の昼間の活動も蕎麦打ちや竹細工などの実習が地元の方の指導によって行われるようになった。これらの変化は議論と相当な準備の結果成されたと想像でき，学生にとってありがたいと同時に地元の方々の意識の変化も見て取れた。なお，公民館の耐震性に問題があったので，この年から夜の就寝場所を公民館から集落内の民家をお借りすることになり，指導教員の私も学生と就寝を共にすることになった。

ところで今回意外な効果を発揮したのがもらい湯である。学生は稽古後２～３人に別れて，指定された集落内の家庭にもらい湯にいく。そこでは単に風呂に入らせてもらうだけでは無く，酒や菓子を頂いたり，そこに住まう家族と話をする機会が得られた。佐渡の他地区も大方そうであるが，祭りは男が行うものとされている。そのため，学生は男女の別なく参加させていただいているが，地元の女子は直接祭りには関わらないことが多い。ただし，門付けの接待，酒，肴，お菓子などの準備など祭りの後方支援に徹しているように思われる。そのため普段は学生が地元の男衆以外の方々と触れあう機会が少ない。なので，もらい湯でそこの家族と話が出来るのはとても貴重な交流といえる。実際に学生にレポートによると，かなり興味深い話をたくさん聞いているようで，ますます活動を有意義なものにしていると考えられる。なお，学生のもらい湯は受け入れ側の負担が大きいことも事実で，ここでの活動以降，様々な集落の学生受け入れをコーディネートしている松田氏によると，未だにもらい湯を実施しているのは豊岡地区だけで，もらい湯の効果を実感している松田氏でも，もらい湯のハードルが高いことを実感されているそうである。

５．学生はどう変わったか

学生たちは佐渡や豊岡での活動を通して様々な変化を遂げていった。例えば2007年３年生で佐渡研修に参加したある女子学生は，研修後もあまり和太鼓に興味を示すことは無かった。授業も休みがちで，結果，卒業が延期となり，佐渡合宿にも参加することとなった。他の学生同様，参加前はあまりやる気は無かったが，合宿後明らかに変化が現れた。他の学生共々祭り本番は一生懸命であったことに違いないが，本当の変化は祭り後であった。松田氏の計らいによりこの学生と，大野に参加した女子学生の２人が13日～15日の３日間松田氏に帯同して佐渡中の祭りを見てまわった。2007年の佐渡研修ではあまり興味を示さなかったが，３日間というハードな行程にもかかわらず，松田氏によると常に興味深く見ていたという。実際に15日夜新潟港まで私が迎えに行ったときも，それらの様子を生き生き話してくれた。このことは他の学生にも言えることで，2007年の佐渡研修ではただ見ていた鬼太鼓を，2009年の豊岡での体験以降，非常に興味深く見ることで出来るようになった。そのことは他集落の鬼太鼓を見ているときに顕著に表れ，実に鋭い感想を述べながら見ている。まさしく鬼太鼓に対する審美眼が醸成されたといっていいと思われる。

また，このとき松田氏に帯同したもう一人の女子学生も大きく変化を遂げた学生であった。彼女は３年時研究室を選ぶ際，教員にはならず公務員になるからと言って私の研究室を選んだ。実はそれまで私の研究室の学生中，現役で教員採用試験に合格した例は１人しかいなかった。そのような消極的理由で研究室に入ってきた。教育実習後も「子どもが怖い」と言っていたことがあった。その彼女が卒業研究題目に選んだのが2008年４月に見に行った大野の祭りについてであった。豊岡での活動が始まる2009年２月頃からそれと平行して大野の集落に通うようになった。大野は稽古がきついだけでなく，昔ながらの男社会で上下関係が厳しいところであった。そんなところに何も分からない女子学生が卒論研究で来たので当初は訝しげな感じで見られたところもあるようだったが，幾度となく通ううちに，打ち解けていった。そして何よりも彼女が大きく成長した。子どもが怖いといっていたのが，「オッサンの下ネタ」にも平気で対処できるようになり，人と接する力が大幅に増した。卒業論文も博士論文なみの資料を添付し，教員採用試験に現役で合格した。そして

何より表情が明るくなった。このこともまた他の学生にも言えることである。2011年には１人（専門学校を含めると２人），2012年２人，2013年２人と教員採用試験に現役合格が続いている。また，それ以外の教員希望者も１次試験合格が普通になり，卒業後の直ぐの採用試験で合格するケースが増えた。

６．考察

このように様々な良い変化をもたらしてきたが，何故そのようになったのか。

一つ考えられるのが，「普段，接することのない人たちとの交流」ではないかと考えられる。かつての日本は大家族のところが多く，地域の人々も積極的に子育てに関与してきた。子どもが親の目を盗んで悪さでもするものならば，近所の「おじさん」にきつくしかられた，というのが普通の社会だったと思われる。ところが核家族化が進行し，さらに人口減少が拍車を掛ける形で，そういった地域のコミュニティーが薄れ，子どもたちは両親，同級生，学校の先生など限られた人以外の人と接する機会が減少ためだと考えられる。知らない大人，他人との接し方が分からなかったり，先ほどの「子どもが怖い」というのも，かつて賑やかだった頃は地域のどこにでも「うるさい親父」と「子ども」がたくさんいて，どう接すればよいか自ずと学習できたが，その機会が減少したために，そう感じたのかもしれない。

また，芸能の学習効果も特筆するべきものである。2009年初めて学生が豊岡の祭りに参加したときは当然ながら学生全員「下手」であった。ただ，教わったことを一生懸命に演じていた。変化があったのは2010年の祭りであった。このとき４年生は祭りの参加２年目であったが，全員がとても上手になっていた。現在は祭りのとき以外にも鬼太鼓の太鼓と舞を披露することがあるが，2009年は祭り終了後，2010年稽古開始まで途中鬼太鼓を演ずることは全くなかったのにも関わらず，である。これは，祭り本番を通して大きく成長していたこと，１年経つ間に芸が身体の中で熟成していったためではないかと考えられる。

そしてもう一つ掲げたいのが「知恵の積み重ね」である。2009年～2012年の初期の頃は酒の飲み過ぎ，食べ過ぎなども起きていた。特に祭りの日は，門付け毎に豪華な食事と酒が出されるので，ペースが分からずに体調を崩すことも少なくなかった。そういった生活面のことや舞や太鼓の所作について，毎年先輩から後輩へ受け継がれることもあり，毎年メンバーが入れ替わるにも関わらず，参加において問題が少なくなってきているように思われる。特に2013年には集落の方に替わって学生が，2014年は卒業生が鬼の面をつけて舞う「大役」を仰せつかることになったが，学生にもそれぐらいの技量をもつ者が表われたということでもある。また，佐渡合宿では隣の柿野浦集落の旧中学校の校舎を利用した鼓童文化財伝研修所で，鼓童のプレーヤーを目指す研修生が毎日「芸」と「おもてなしの心」の研鑽に励んでおり，研修所のご厚意により毎年学生が研修生と交流させてもらっている。そのことも良い影響があるようで，個々の学生の３年入室時の雰囲気と卒業時の雰囲気が変わっているとように思われてならない。

７．今後について

このように学生が集落に入って活動することは，現実にそこにいれば教育的効果を実感する。しかし，問題が無いわけではない。まず，集落の過疎化は毎年徐々に進行している。昨年の祭りでは元気に応援してくれていたお婆ちゃんが今年はいない（老人施設に入居，あるいは死亡）など，寂しい現実がある。実は佐渡の集落は日頃は空き家が多いが，お盆など島外に住んでいる住人が帰ってくる。それに合わせて豊岡では「夏祭り」を催している。研究室の学生にも参加を呼びかけているので，帰郷した住人と学生が触れあう機会もある。しかし，祭りの日には帰ってこない。これは島内の仕事が少ないことも理由として挙げられるだろう。実際，松田氏によると島内の企業の内，黒字なのは３割程度だという。そのように考えるとこれから先の展望は決して明るくない。また，引率する教員の負担も大きく，誰にでもできることではないだろう。しかしながら，希望を捨てずに，さらに新しいことに試行錯誤しながら活動を続けたいと思う。

謝辞

松田祐樹氏，豊岡集落の皆様，鼓童文化財団関係者の皆様には日頃の活動を通して大変お世話になっております。ここに御礼申し上げます。